

587 原発性肺癌におけるNCC-ST439およびBFPの補助診断的有用性について

日本大学医学部第一内科

○高橋典明 弘田達哉 本橋雅昭 大嶋康 木下靖
山口善文 池田真一郎 谷川恵 吉信尚 古屋佳昭
茂木正行 升谷雅行 林裕人 堀江孝至

はじめに：現在まで、さまざまな腫瘍マーカーが測定・検討されてきた。我々も、CEA, CA19-9, CA125, TPA, NSE, SCC及びSLXにつき、肺癌患者での有用性を報告してきた。今回さらにNCC-ST439, BFPの2種類のマーカーについて、補助診断的有用性を検討した。

対象：原発性肺癌患者60（男性40、女性20）例で、組織型別では腺癌31例、扁平上皮癌17例、小細胞癌6例、大細胞癌3例で、対照は、良性肺疾患患者26例、健康成人ボランティア166例であった。

各々につき、血清中の各種腫瘍マーカー値を測定した。

結果：1) NCC-ST439, BFPとも、良性肺疾患患者、健康者と比較して、肺癌患者で有意に高かった。2) 陽性率は、NCC-ST439が38%、BFPが32%と、TPA, CEA, SLXについて高かった。3) 組織型別では、NCC-ST439は腺癌で有意に高く特異性を示したが、BFPは一定の傾向を示さなかった。4) NCC-ST439はTPAと、BFPはNSEと相関を示した。

結語：NCC-ST439は肺腺癌の補助診断に、BFPは肺癌のスクリーニングに有用と思われた。

589 原発性肺癌患者における血清BFP測定の意義について

新潟大学医学部第二内科：

○畠山 忍, 永井明彦, 野沢 悟, 中島喜章,
水沢彰郎, 宮尾浩美, 来生 哲, 荒川正昭

【目的】原発性肺癌患者の血清 Basic Fetoprotein (BFP)を測定し、その有用性について血清NSE, SCC, CEA, NCC-ST-439(ST-439)と比較検討した。

【対象と方法】未治療の原発性肺癌患者80名（腺癌36名、扁平上皮癌14名、大細胞癌3名、小細胞癌14名）と良性肺疾患57名についてBFPをEIA法にて測定し、cut off値を正常人の平均値+2SD(76ng/ml)とした。

【成績】肺癌患者全体の陽性率は36%であり、良性肺疾患の陽性率は16%であった。組織型別にみると腺癌39%、扁平上皮癌21%、大細胞癌0%、小細胞癌52%であり小細胞癌で最も高かったが、各々の組織間では有意差は認めなかった。病期別では、I期8%、II期33%、III a期40%、III b期58%、IV期42%と、進行癌で高い傾向が見られた。感受性では、CEA(55%), NSE(39%), BFP(36%), SCC(25%), ST-439(24%)の順で、特異度では、ST-439(98%), NSE(96%), SCC(89%), BFP(81%), CEA(74%)の順で、正診率では、NSE(66%), CEA(63%), BFP(58%), ST-439(55%), SCC(52%)の順に高かった。

【結語】血清BFPは、NSEと同様に小細胞癌で最も高い陽性率を示した。病期別では、進行癌に高い傾向が見られた。他のマーカーとの組織型別 combinationにより陽性率が上昇し、腫瘍マーカーとしての有用性が高まった。

588 肺癌における Basic fetoprotein(BFP)の臨床的検討

防衛医大第2外科¹, 自衛隊中央病院研究検査部²

○尾関雄一¹, 大鹿芳郎¹, 鈴木 節², 増田秀雄¹,
高木啓吾¹, 菊地敬一¹, 田中 勸¹, 尾形利郎¹

目的：BFPはヒト胎児の血清、腸および脳組織中に見られる塩基性胎児性蛋白質であり、種々の悪性腫瘍の腫瘍マーカーとして用いられている。我々は、新しく開発されたEIAキットを用いて、肺癌におけるBFPの腫瘍マーカーとしての有用性について検討した。

対象・方法：対象として原発性肺癌138例、および良性肺疾患30例（肺炎・肺膿瘍12例、肺結核12例、肺気腫4例、サルコイドーシス2例）について検討した。測定にはBFP EIAキット（日本化薬）を用い、cut off値を75.0ng/mlとした。

結果：下表のごとく結果を得た。

	陽性率
肺癌	26.1% (36/138)
扁平上皮癌	21.3% (10/47)
腺癌	15.1% (8/53)
大細胞癌	57.1% (8/14)
小細胞癌	45.5% (10/22)
腺扁平上皮癌	0% (0/0)
良性肺疾患	6.7% (2/30)

また、BFPは臨床経過と相関して変動し、肺癌、特に大細胞癌、小細胞癌の腫瘍マーカーとして有用であると考えられた。

590 肺癌の末梢血と腫瘍還流血中の腫瘍マーカーの検討

浜松医科大学第一外科

○堀口倫博 野木村宏 杉村久雄 伴野隆久
鈴木一也 原田幸雄

目的：末梢血中の腫瘍マーカーは、種類によってはその評価がほぼ確立され、臨床的に広く利用されている。しかし、腫瘍還流血中の腫瘍マーカーの検討は数少ない。我々は、肺癌において末梢血と腫瘍還流血の腫瘍マーカーを調べ、その意義について検討した。

対象と方法：1988年6月以降、肺癌にて肺葉切除術を施行した症例のうち、腫瘍より還流する肺静脈から採血し得た15例を対象とした。CEAとSCCを中心として、末梢血と腫瘍還流血（肺静脈）の腫瘍マーカーを測定し、病理組織標本においては、腫瘍の静脈侵襲、リンパ管侵襲、リンパ節転移などについて調べた。

結果：CEAでは、末梢血で高値であったものは3例であり、いずれも還流血の方が高値であった。末梢血は正常範囲であり還流血で高値であったのは1例である。SCCは、末梢血で高値であったものは1例のみでそれは還流血においても高値であった。末梢血は正常範囲であり還流血で高値であったのは3例である。CEAにおいてもSCCにおいても還流血の方が陽性率が高いが、SCCの方がより顕著であった。病理組織標本における静脈侵襲、リンパ管侵襲、リンパ節転移や腫瘍径、病期分類などの因子と血中CEAおよびSCCの上昇との関連性をみると、静脈侵襲とリンパ管侵襲が最も関連が認められた。